

「特集」菊池佐野区が熊大生と歩いた軌跡

今を創る、 未来を耕す

どこにでもある中山間地の一つ、菊池佐野区。とあるきっかけで始まった学生との交流が多くの住民を巻き込み、活気が生まれました。地域は刺激を、学生は学びの機会を得るなど、手探りながらも双方にメリットのある活動が続いています。少しずつ歩み寄り、つながっていった地域と若者たちの軌跡を追いました。

山あいの集落が明るくなった

「収穫した後のワラはどうするんですか」「くくって牛のエサにするんよ」

爽やかな秋空の下、農作業にいそしむ住民と学生たち。隈府から北東約4^{キロ}先

の山の中にある菊池佐野区では、熊本大学のボランティアサークル「D-SEVEN」の交流が続いています。

きっかけは平成28年熊本地震で被災した市内での復興ボランティア活動。現在も月1回、10人程度が農作物の収穫や草刈りなどの協力を訪れます。

「初めは若い子と何を話していいかわからなかったけど」と笑うのは、当初から交流に関わってきた渡辺勝則さん（菊池佐野）。「学生が来てくれるようになって佐野は明るくなった。本当に感謝しているよ」

頼もしい学生たち

菊池佐野区は人口70人程度の小さな集落で、高齢化率は57%を超えます。農家の年齢は70代が多く、一番若い人でも47歳。コメとクリが主な農産物で、山や農地、棚田に囲まれた中山間地の一つです。

「学生たちのアイデアや発想はいつも頼もしい」と渡辺さん。農業ボランティア活動や地域イベントの企画、収穫体験など交流機会は広がり、今では交流人口の増加や地域活性化へとつながりました。7年以上続く地域と学生との交流は、住民の地域活動の原動力になっています。



【問い合わせ先】市長公室 ☎0968(25)7252



集落を見下ろす棚田。活動を通して「新たな発見や違う考え方を持つことができた」と話す学生も多い



知ってほしい— 私たちが大好きな佐野のこと



菊池佐野区に通い続ける中で、学生たちは地域に魅了されます。「きれいな景色に、おばあちゃんのだご汁、大好きな佐野のことをみんなに伝えたい」。若者たちは、佐野ファン獲得のために走り出しました。

きっと好きになってくれる
私たちが地域のためにできることは何だろう。活動を続ける中、農業ボランティア以外にも支援できることはないか考えていた学生たち。今年3月に熊本大学を卒業したサークル元メンバーの東颯汰さんは当時を振り返ります。「佐野の皆さんは、いつも僕たちを優しく受け入れてくれてすごうれしかった。もっと地域の力になりたいと思ったんです」

昨年10月、サークルメンバーを中心に「佐野ファン倶楽部」を発足。菊池佐野区の農作物ファンを増やすこと、交流資金を調達し地域との継続的なつながりをつくることを目指してクラウドファンディングに挑戦しました。「ここには美しい棚田の風景やおいしい農産物もある。ここを知ってもらえれば、好きになってくれる人がもっと増えると思いました」



地域に恩返しできた
目標額は80万円。「最初は資金が全然集まらなくて大変

でした。でも決めたからには最後までやりきりたかった」と東さんは話します。チラシ配りやSNSでの情報発信の他、企業へ直接営業に出向き思いを語ることもありました。手探りの活動の中、ついには目標額を達成。「佐野の皆さんはクラウドファンディングの成功をとて喜んでくれました。思いに応えられてホッとしましたね」

返礼品は金額に応じ、今年収穫したコメとクリを届けた他、地区の景観や郷土料理を紹介する「季節のお便り」も全員に送付しました。大学生の取り組みはマスコミにも取り上げられ、大きな反響を得ました。「クラウドファンディングが成功したことで、多くの人たちに佐野のことを知ってもらうことができました。少しは恩返しできたかな」と手応えを感じています。

祭では、さらなる佐野ファンを増やすため、菊池佐野区で収穫されたコメとクリを使った「クリ高菜ご飯」を販売。約500パックが完売しました。「収益は佐野の皆さんとの交流資金に使いたい」と話すのはサークル現メンバーの陣あかりさん。「私たち学生にとっても貴重な体験になっています。先輩たちの思いを引き継いで、これからも活動を続けていきたいです」
今後は地元の資源を使いお金を稼ぐ仕組みをつくろうと、菊池佐野区で収穫されたコメのパッケージデザインの作成や、農産物の公式オンラインショップを開設予定です。学生たちの思いは、次の世代に受け継がれています。

先輩の思いを引き継ぎたい
今年11月に開催された大学

1_ 熊大生がデザインした佐野ファン倶楽部のキャラクター
2_ 大学祭ではクリ高菜ご飯を販売
3_ 学生たちが佐野区で作業する日は地元の主婦が手料理を振る舞うことも
4_ クラウドファンディングの返礼品を準備する地元住民と学生
5_ 農業ボランティアをする学生
6_ クラウドファンディングの支援者に送付した「季節のお便り」

菊池佐野発!

さのまるん



菊池佐野で収穫されたクリを商品開発

「農事組合法人 菊池佐野」では、クリの産地としてブランド化を進めるために、冷凍むきグリ「さのまるん」を開発しました。200gと400gの2種類あり、パッケージの裏面には、クリを使ったおすすめレシピを掲載しています。

菊池佐野区で販売しています。購入を希望する人は下記までお問い合わせください。

問い合わせ先

☎090(7534)3535 渡辺
☎090(3072)6550 松本



9月に開催したクリ収穫体験のモニターツアー



農業法人で導入したクリ選別機。作業の負担軽減につながっている



学生たちを出迎えるために集落に植えたヒマワリ

変わり始めた小さな集落

「おれらももっと頑張らんといかんよな」一。学生たちに背中を押され、変わり始めた住民たち。地域の課題解決に向けて、菊池佐野区の新たな挑戦が始まりました。

必要だった農業法人設立

「集落を存続させていくために、学生との活動を続けていくためには、自分たちが変わらんといかんと思つた」と話すのは、農事組合法人菊池佐野の理事・渡辺勝則さん。当初から学生との交流に深く携わってきました。

小規模農家が多く、高齢化も進んでいた菊池佐野区。後継者不足による耕作放棄地増加に歯止めをかけるための農業法人化は進んでいませんでした。

また、学生との交流を続けるためにも体制整備が必要でした。「最初は数人の農家で受け入れていただけの限界があった。交流を続けていくために法人を設立したんよ。学生たちに背中を押してもらったね」と笑顔を見せます。

平成30年に農業法人を設立。高齢者の負担を軽減するため大規模農機を導入し、作業の効率化を図りました。

農事組合法人菊池佐野 理事 渡辺勝則さん



菊池佐野区の新たな挑戦

現在、菊池佐野区では地域内で受け継がれてきたクリ園を集約し、地区全体で整備を進めています。クリの6次産業化を目指し、今年には加工設備を導入。今年にはクリの販路拡大やPRを目的に、市と共同で収穫体験のモニターツアーを開催しました。

体験会には、本市の物産展を毎年開催している福岡市の農産物直売所従業員約20人が参加しました。地面に落ちたイガグリをトンングで挟み、「楽しい」「初めて拾つた」などと話す参加者たち。学生も協力した初め

での収穫体験は大成功を収めました。

収穫後には、選別所や今年から販売を始める冷凍むきグリについて説明。生産者と農産物販売者の交流の機会をつくり、直接取引することでさらなる収益向上を目指しています。

今後、収穫体験を続け、高齢化する農家の負担軽減にもつなげていく予定です。

一緒に新しい発見をしたい

「若者たちが交流を通じて道を切り開いていく姿を

見て、「自分たちも頑張ろう」と勇気をもらつた」。渡辺さんは今までの活動を振り返ります。「よそものが集落に入ってくることに抵抗のある人もいたけど、交流を続けてきたことでみんなも外部の人と接することに慣れてきたよ」。認知度向上や新たな販路拡大を目指す。試行錯誤は続きます。「集落の中には、学生と関わることで行動が変わった人もいる。交流を続けることでおれたちの課題も見えてきた。これからも一緒に新しい発見を見つけていきたいね」



菊池佐野 前田隆義さん

地域に笑い声が増えました

学生が来てから、地域に笑い声が増えた気がするね。いつもは家と畑の往復だけで、人と会わずにあいさつすることがない日もあるけど、大学生が来るとにぎやかになるよ。

若い人と話をするのが楽しいから、地域の行事に参加する人も増えたと、そのおかげで地域がまとまるようになったね。

クラウドファンディングをしたいと提案してきた時も本当にうれしかった。佐野での新たな挑戦を楽しみにしながら、これからも一緒に活動したいと思ってるよ。



菊池佐野 松本美佐子さん 中丸芳子さん

学生たちから元気をもらってます

学生が佐野に来たときに、料理を作ってもてなしたり、郷土料理の作り方を教えたりします。料理を作ることはあっても、人に教えることは少なくなったから、こういう機会はありがたいね。

クリご飯やだご汁などは、私たちににとっては食べ慣れた料理だけど、いつも「おいしい」「懐かしい気がする」と言って喜んで食べてくれるから、うれしくて作りがいがあるよ。

学生は、私たちが考えもしなかったことを思い付く。話をしているとなんだか私たちも若返った気がするよ。これからも田舎の味を教えてあげたかね。



さまざまな形や大きさの田んぼが広がる菊池佐野区



車が停車中に撮影しています 7



6

1・5・7_いつも笑顔が絶えない農業ボランティア。季節ごとにクリの収穫や枝のせん定、除草などを行う 2_地元の主婦たちが郷土料理を伝授 3_毎年3月には、卒業する学生に感謝の思いを込めて手料理を振る舞う 4_学生たちを出迎えるために植えたコスモス 6_集落の入り口に学生が作成した看板を設置。キャラクターのモデルは松永芳知さん



4 3



1



5 2



—お互いの第一印象を教えてください。

田中(学生) 自然が豊かだなと思いました。実家が田舎だからか、佐野に来ると安心します。引っ込み思案だった僕でも、いつも皆さんが優しく受け入れてくれました。

井上(学生) 自然が豊かでした。田んぼがあって、ジブリみたいな世界だなんて思いました。コロナ禍で勉強ばかりしていたので、佐野で農業ボランティアができるのはうれしかったです。

松本 正直、最初は相手をするのが面倒くさいと思ってた。でも、来てくれることに親しくなってる。今では毎月来てくれるのが楽しみだね。

松永 おれは農家の最年少(47歳)で学生が一番年齢が近い。みんな年齢が離れているから心配だったけど、今は本当に元気をもらってるよ。

—学生が来てから変化したことはありますか。

松本 芳知が一番変わったんじゃないかな。地区の行事に

あんまり参加してなかったし、地域と関わり方も変わってきた。学生が来てから区役員もしてくれるようになった。本当にびっくりしている。「芳知頑張ってるよね」とみんな言っているよ。

松永 自分ではあまり変わったとは思ってないけど、そうかもしれない。学生が来るとうちの村に若いうちは残るってことは考えていなかったけど、出会いって大切だね。

井上(学生) 変わったといえば、佐野に来たことがきっかけで農業関係の仕事に就いた先輩がいます。卒業論文で取り上げた人もいて、佐野区から刺激を受けたサークルのメンバーが多いんですよ。

松本 卒業しても佐野に通ってくれる子もいる。本当にありがたいね。

—7年以上交流が続いている要因は何だと思いますか。

松本 単純に楽しいからかな。最初はこんなに長く続くん

—今後の展望を教えてください。

田中(学生) 皆さんは少子高齢化で大変な状態だと思うんですけど、さまざまな活動がされています。少しでも力になれるように、楽しみながら佐野に通いたいです。

井上(学生) 私たちが肌で感じた佐野の魅力をもっと多くの人にお伝えできるようにしたいですね。

松永 学生が来て地域が明るくなった。学生に「私たちが佐野に来たから地域が変わった」と思ってもらえるようにもっと頑張りたい。

松本 最近は食事会や村の祭り、餅つきなど、毎年いろんなことをやっている。形を変えながらね。それは若い子たちが来て刺激をくれるから行事で決まっているからと同じことをしていると、地域が弱くなる。少しずつ変化を取り入れて、地域のみんで議論して、会話とともに佐野を成長させていきたいね。

| Scene 4 | 地域と学生の本音

—学生がもたらした変化—

菊池佐野区は熊大生たちとの交流によって、地域に変化が生まれています。学生、住民それぞれの視点でこれまでの、そしてこれからの活動について語っていただきました。



熊本大学3年生 田中健太さん



熊本大学4年生 井上陽菜さん



菊池佐野 松永芳知さん



菊池佐野 松本賢一郎さん

外部との交流が 地域を持続するヒントに――

菊池佐野区と熊大生の交流は、地域にどのような変化をもたらしたのでしょうか。本市の地域研究を行っている熊本県立大学の柴田祐教授に話を聞きました。

両者の出会いは正に「縁」

菊池佐野区と学生との活動の素晴らしさは7年以上にわたり交流が続いていることです。地域が学生を受け入れ続けるのは簡単なことではありません。単純な労働力ではありませんし、準備する手間もかかります。

ここ数年はコロナ禍の影響もありました。そんな中でもここまで長期間つながりを持ち続けられたのは信頼関係があったからだと思っています。両者の出会いは正に「縁」としかいいようがありません。今回のケースでは、両者に良い面がありました。地域は若者と関わることで刺激をもらい、新しい取り組みを始めています。学生は世の中を知る学びやアイデアを

現し、成功体験を積み重ねる挑戦の場になりました。お互いに実りのある交流です。

地域に関心を持つきっかけに

これまでの交流の成果で、地域活動が活発になりました。しかし、人口減少や少子高齢化による将来への危機感は消えています。

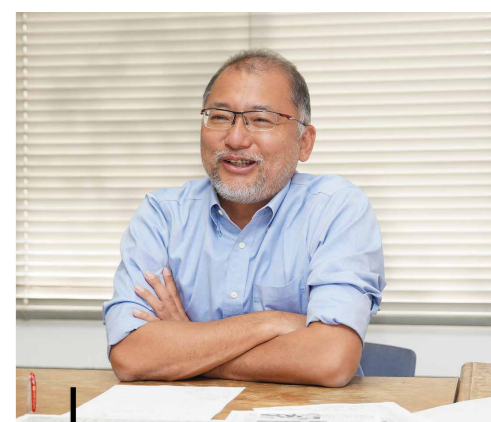
期待するのは地域を出ている子どもたちの世代です。現在、菊池佐野区には毎月学生が来て、マスコミにも取り上げられています。これは子どもたち世代にとってもうれしいことではないでしょうか。例えば、クラウドファンディングの支援やイベントの日だけ帰省するなど、関わり方はたくさんあります。地域の次世代を担う人た

ちが、地元に関心を持つきっかけになるといいですね。

今の暮らしを見つめ直す

今後、日本の中山間地の人口が減ることは避けられません。大切なのは地域が持続していくこと。学生ではなくても、企業や行政など外部の人と関わることはできません。交流が進むことで、他の地域でも自分たちの暮らしを見直すことにつながるよう期待しています。

菊池佐野区と学生との交流は、お互いが試行錯誤を繰り返しながら続いてきました。活動が継続していくことで、さらなる変化が出てくることでしょう。地域の内外から生まれた連鎖反応が、どのように展開していくのか楽しみです。



Profile | プロフィール

熊本県立大学
環境共生学部 教授

柴田 祐さん

大阪大学工学部卒、大阪大学大学院博士後期課程修了。博士(工学)。平成29年より現職。専門は地域計画、農村計画、景観計画。県内の農山漁村地域における地域資源を生かした地域づくりなどの調査、研究を進めている。



熊本県立大学・柴田教授の研究室では、大学生の知見や技能をまちづくりに生かす「域学連携事業」の一環で、10年以上田島地区で交流を続けている

市と熊本県立大学では、中山間地の課題解決に向けて将来の人口動態を分析する「集落点検」の共同研究を行っています。📍地域振興課集落定住支援室 ☎0968(25)7250



Scene 6 | エピローグ

「あと同年この活動が続くか分からない。でも学生たちと話しているとなんか変わるんじゃないかと思えてくるんよ」。未来を見据え、前を向く渡辺勝則さん。今年、大学を卒業した東颯汰さんも「これからも佐野に関わっていきたい」と地域への思いを語ります。

これまでの活動が評価され、昨年2月に「つなぐ棚田遺産（農林水産省実施）に認定された菊池佐野区。今や全国から注目される中山間地の一つです。

「学生に喜んでほしい」「佐野の皆さんの笑顔が見たい」。互いを思いやる地域と学生。築き上げてきた信頼関係が、世代を超えてつながる強い絆があるからこそ、今でも交流が続いています。

少子高齢化が進む中、菊池佐野区でも人口減少は避けられませんが、それでも一歩踏み出すことで「できること」はたくさんある。今回の事例は、地域の未来を考えるヒントになるのではないだろうか。楽しみながら、柔軟に変化しながら。変わり続ける菊池佐野区と熊大生の挑戦は続きます。

「できること」はたくさんある